

酒井泰弘著『リスクの経済思想』

ミネルヴァ書房、2010年、x+270p

御崎加代子

Kayoko Misaki

滋賀大学 経済学部 / 教授

現代の経済社会において、我々の生活が様々なリスクと切っても切れない関係にあることは、疑いようのない事実である。しかしそれは今に始まることではなく、市場経済が成立する以前のはるか昔から、そうであったに違いない。人々は、単純な商取引をする際においてでも、何らかのリスクや不確実性を覚悟の上で、行っていたはずである。

しかし驚くべきことに、経済学の歴史において、リスクや不確実性の問題が真正面から取り組まれるようになったのは、20世紀の前半になって、フランク・ナイトやJ.M.ケインズが登場してからである。そして21世紀を迎えて、ますます高度化し、複雑化する経済社会において、人々を取り巻くリスクの問題は、さらに深刻なものになってきている。はたして現在の経済学は、それに応えうるのか。あるいは、このような問題を解決するために、経済学はどのように進化すべきなのか、その指針を探るのが、本書である。評者の専門分野は経済学史であるので、そのような観点から、本書の意義を示すこととする。

本書でも指摘されているように、現代経済学の出発点となったワルラスの一般均衡理論には、リスクや不確実性が入り込む余地はない。市場の参加者は、完全知識と完全情報という前提のもと、自らの効用や利潤を極大化する。経済学がこのような枠組みの中にある限り、リスクや不確実性に満ちた現実経済を、十分に分析することはできない。このような新古典派的アプローチに反して、経済学の歴史上初めて、リスクと不確実性の問題に真正面から取り組んだのが、ナイトの著書『リスク、不確実性および利潤』(1921)だというのが、従来の理解である。

さて本書は最初に、このナイトの著作よりもずっと以前に、同じような問題に取り組んでいた学者たちをとりあげる(第2章と第3章)。本書が特に重視するのは、ダニエル・ベルヌーイ(Daniel

Bernoulli, 1700-82) とアダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790) である。数学者ベルヌーイは、リスクの下での意思決定についての研究をし、1736年に「期待効用基準」についての論文を発表した。しかしそれはあまりにも独創的であったために、その後200年以上、リスクの経済学の世界で無視される運命をたどることになった(本書p.38)。またアダム・スミスは、まぎれもなくリスク経済学の先駆者であった。本書は、『国富論』(1776) の第10章において、スミスが賃金と利潤の決定に及ぼす心理的・社会的・文化的ファクターの影響を論じていることをとりあげ(本書p.74)、あまり知られていない、リスク分析の先駆けとしてのスミスの一面を明らかにする。実は、スミスは人間が「利得の機会を過大評価し、損失リスクを過小評価する」という的確な観察を、『国富論』に先駆け『道徳感情論』(1759) において論じていた。そしてナイトは、スミスのこのようないリスク分析を再評価したという(本書p.77)。

このようにリスクの経済学を論じるにあたっては、人間の心理についての深い洞察が必要である。人間本性をテーマにしたスミスの道徳哲学は、この点において、実は時代を先取りしていたといえる。アダム・スミスの「見えざる手」がおよそ100年後に、ワルラスの一般均衡理論やパレート最適の概念に結実し、競争均衡の最適性がついに示されたと考えるのが、経済理論史の常識とされる中で、このようなスミス解釈は重要である。見方を変えれば、古典派経済学者は、現実の経済社会や人間に対して、現代の経済学者よりも、鋭い分析を行っていたということも言える。スミスの経済学を単なる一般均衡理論の前史ととらえる現代的な解釈は、新古典派的な立場にたった偏狭な見方だとも言えよう。

本書でも強調されているように、人間は複雑な生き物であり、経済合理性には限界がある。競争

心をもったり、危険を冒したり、過ちを犯したりする。そして実は新古典派の創始者とみなされるマーシャル本人が「経済学者が対象とするのは、あるがままの人間の研究である。抽象的な人間ではなくて、生身の血の通った人間なのである」(本書p.39) という言葉を残しているのである。経済学は、単なる利潤や効用極大化ではとらえきれない人間の複雑な本性についての洞察を伴ってこそ、現実経済の的確な分析が可能となるのである。そしてマーシャルのこのような経済学観は、ナイトにも影響を与えていたことを、本書は指摘している。

本書は、このような問題意識に基づいて、数学者パスカル (Blaise Pascal, 1623-62) が、なぜ晩年に人間の研究に向かい、不朽の古典『パンセ』を残したのかということも論じている(本書第4章)。パスカルは経済学者ではなかったが、「抽象的な学問と人間の研究にはある種の連続性があるはずだ、少なくともパスカルの心の中では、両者の学問は相対立するものではなく、相互補完的なものである」(本書p.98) という本書のパスカル解釈は、まさに「合理的経済人」の前提に基づく現代の経済学に対して、あるべき指針を示しているのである。

現代の経済学が閉塞状況にある一つの原因は、経済学が描く人間像が「幼稚で単純すぎ、人間としての深みや複雑性がほとんど感じられない」(本書p.110) と説く本書は、ケインズの経済学観にも言及する。ケインズによれば、経済学には論理と直感の融合、理論と政策の総合、幅広い知識欲、深い歴史認識などが必要であり、一人の人間がこのような多面的な資質をもつことは難しい。ちなみに、このケインズの経済学観を、経済学研究者や経済学を学ぶ学生は、しっかりと認識しておくことは大変重要であることを、評者も日頃から痛感し、講義で時々とりあげている。そして本書は、このケインズの指摘した、経済学への多面的なアプローチ

チをまさに実践していることに、読者は気づくであろう。

さて冒頭で触れたように、経済学の歴史上初めて、リスクと不確実性の問題に取り組んだのが、ナイトの著書『リスク、不確実性および利潤』(1921)である。この中でナイトは、「不確実性(uncertainty)」と「リスク(risk)」の概念を明確に定義している。現代において、両者の区別は曖昧にされることもあるが、今この区別に立ち返ることは重要であることを本書は指摘する。ナイトは、測定可能な不確実性をリスクと呼び、測定不可能な「真の不確実性」と区別した(本書第5章)。ナイトは、企業と利潤との問題を扱い、利潤はこの「真の不確実性」に対する支払であり、それに対して、リスク負担を専門に扱うのが保険であることを説いている。そして管理経済には、この「真の不確実性」がないために重大な欠陥が存在するのだという。

この議論は、ケインズの『一般理論』(1936)におけるアニマル・スピリッツの議論に相通じるものである。それは、「不確実性の世界において、計算抜きで不確実性に果敢に挑む人間が存在しなければ、経済社会のダイナミズムは衰え死滅に至るだろう」(本書p.130)という点である。すなわち「不確実性」の元来の定義を再認識することは、経済学を現実の分析に立ち返るだけでなく、我々の経済社会の基礎を再確認することにも通じるのである。そして視野の狭い「リスクの経済学」を乗り越え、真の意味での「不確実性の経済学」の樹立を図らねばならない(本書p.141)ということが、本書のもっとも重要なメッセージなのである。

そしてゲーム理論や情報の経済学を経て、現代経済学の様々な潮流は、このような観点に立てば、どのような理論と解決策を与えることができるのだろうか? 本書を読破した読者は、経済学の将来について、多くの可能性と難問が待ち構えているこ

とを再認識するであろう。と同時に、過去の経済学者の理論や思想を学ぶことは、単に歴史の知識を得るというだけでなく、現在を知り、未来への指針を得ることにつながるという、まさに経済学史という学問分野の意義も実感することができるであろう。

最後に、本書には、著書の経済学者としての人生経験と、その様々なエピソードも随所に盛り込まれ、学術書と言えども楽しく読める工夫がなされている。経済学研究者や大学院生だけでなく、経済学を学び始めたばかりの学部生の皆さんも、ぜひ手に取って、経済学者の世界に親しむ第一歩としてほしい。

